

---

# ドジっ娘貞ちゃんと陰陽師

ケチャップ男

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドジっ娘貞ちゃんと陰陽師

### 【Nコード】

N1602W

### 【作者名】

ケチャップ男

### 【あらすじ】

主人公の阿部定信と貞子（笑）が送るコメディ小説  
追伸：これは、作者の処女小説です。  
なので期待しないで下さいww

## 1話（前書き）

気付いたら1000ユニーク超えてたので。

連載物にしてみた。

べっべつにミスって短編にしちゃったとか、そんなんじゃないんだからね／＼／＼／

元の奴はけすつもりはないです。

初めて書いた物ってこともあります。

なにより見てくれた人に申し訳ないからな（キリッ

読み直してみました、うん…まあ中1の時に書いた奴だから、しようがないよね。

書き直すつもりはないです。

べっべつにメンドイとかそんなんじゃないかr（ry

月1で書いてくけたらいいなあとか考えてますんで、よろしく

……ゴメンうざいねww

ちなみに随時感想募集中です。

## 1話

俺の名前は阿部 定信「アベ サダノブ」通称ノブ 家が陰陽師で自身がオタクな事を除けばいたって普通な高校生である

急にこんな事を言い出したのは目の前の事実から逃げだしたい気持ち具現化したいいわゆる現実逃避である

そして目の前の現実とゆうのはこのスーパリアルティメット異次元級ドジッ娘の事である

もちろん自分で連れ込んだりした訳じゃなくて友達の持ってきた1本のビデオから始めまったのである……

ここは愛しのmyルームでありおまけに今日は日曜日まさに国民のほとんどが暇を持て余す日である

そしてそんな暇な学生が一番最初に閃くひまつぶし第一位は無論公園にエロ本やその類のビデオを探すことである（作者統計）

学生時代とはまさに女性の裸体にエロスをみいだす時期で作者いわく丁度いい年頃なのである

そして定信もまたその一員であり今日は仲間と一緒に狩場（近所の公園）にエロ本狩りにおもむいたのであった

そして狩り場で隊員Aがエロビデオを採取したのだが

あいにく家電技術の最先端を走る隊員の多くはビデオが再生できる機械を持っていなかったのだが

仲間達の中で唯一ビデオが再生できる機械をもってる奴がいた

それが我らが主人公定信である

そして都合のいいことに両親が旅行に行ってた定信は仲間達と共に自宅へかえり

ビデオを再生した

すると>ザー<画面いっぱい砂嵐

巻き戻したり早送りしても変化はなし

そしてそれを見た隊員達は意気消沈してそれぞれの家にかえつていったのだが

残された定信は砂嵐を眺めながらビデオの処分方法を考えてたそのときだった

ぱつと画面が某ホラー映画にでてくる井戸のようなものに画面をかえた

気味わりいと考えながら好奇心で見続けてると井戸からニューと白い手がでてきて井戸の端を掴んだ。

その手は、青白くむわあつと体を包んでしまうような、そんな錯覚をおぼえる程の嫌な気が溢れてきてるのg>つるつ< …… 井戸の端に掛かっていた手が消えた。まさか…落ちたいやいや、そんな訳がないだってあの気は絶対ヤバイや<くヒューバチャン> 画面の中に水しぶきが飛び散った。

こらえきれず吹き出すと頬を膨らしたのロングヘアー女がびしょ濡れになってゆつくりと出てきた、顔はかみで隠れてみえない。

完全に今ので相手を舐め切っていた定信は、その様子をみて、少したじろぐ。

そしてゆつくりと歩きじよじよにカメラに近づいてくる、その女h  
>ドテツ< あつコケた さっきまでの真面目な空気が一転、定信は大爆笑。

涙目+落ち葉まみれの女がプルプルしながら立ち上がった

半泣きでやつと画面の一番近くにくると画面からどんだん体がでてきた

そして体が完璧に出る寸前でテレビの額に足を引っ掛けまた転んだ  
「ふみや!?!うーいたいですよー」

とうとう貞子かぶれの女は泣き出した。

定信はこんな状況で放置できるような度胸もない。しょうがなく慰めてると

「わ、わたじい、がんばっでえるのにー」

と泣き声で愚痴をこぼしはじめた。

「はいはいがんばってるよ」  
決して泣いてる事を口実にスーパーアルティメットドジッ娘につけこもうなんて思っていないぞ

というわけであのような状況におかれたわけだが……

これからどうするか…選択肢1自己紹介 選択肢2テレビに押し込む 選択肢3襲う 選択肢4親に助けを求める 選択肢5襲う よしまず一言「どんだけ、どんだけ性欲まみれじゃ俺は!!」  
思わず叫んでしまったがまあいい

うーんやつぱり自己紹介だよなうんそれがいい  
さすが俺だぜ 俺は変態だが礼儀をわきまえられる、そう変態紳士だからな

ははははは…あれ??目から魂の汗が  
まあいい名前から紹介でいいよな

「おつすオラゴクいや定信 サダってよんでよ」俺の中で最高の爽やかスマイルを浮かべて右手を差し出す

「ほえっ!?!わっわたす…私は異土内 ですよっよろしくお願いします…!!」

また噛んだよこの子ww

っていうか握手してくれるのはいいんだがめちゃくちゃいたいッス  
ほら手が紫に細胞が俺の細胞がー

「うんよろしく貞子ちゃん それはいいとして痛いんですが手が痛いんですが」

「うへっ!?!すいません ごめんなさい サダ君ごめん」  
俺への謝罪を口にしながら高速で土下座したす貞子ちゃん ふむ悪い気はしんげふんげふん

「いやいやこちらこそ我がままをいってすいませんした」

俺も負けじと高速土下座を繰り返す

広い居間の中で目にも留まらぬ土下座をくりだす男女…

こうして1日はすぎていくのだった



## 2話

やあ俺こと阿部です。

あの衝撃的な初対面から30分間ずっと土下座をしまくっていた。俺達だが、永遠に続くと思われたそれは、些細な事で幕を閉じた。その原因は…まあ直接聞いて貰った方が分かり易いだろう。

>ぴんぼーん、ぴんぼんぴんぼんぽんぽんぴんぽん…<

そう、この非常に粘着質なインターホンはきつと、奴だ。

<おにいちゃん。開けてー。ユあスウィートスうウィートシスターの帰宅ですよー>

これでわかって頂けただろう。妹だ。

何故だ？奴は陰陽師として父と幽霊退治に電車も通ってないような山奥の集落にいった筈じゃあなかったのか？

いや、重要じゃない。問題なのは、インターホンが鳴ってるにも関わらずに土下座し続けてるコイツだ。

奴は両親の血を強く引いてるエリート陰陽師だ、自称貞子のコイツをみたら、一瞬で除霊しちまうに違いない。

「よし貞子。なにも言わずに俺の言うことを聞け。」

「はへ？なんですか？」

コイツが鳴り続けてるインターホンに気付いてないのは、この際気にしない。

「あの押入れの中に入ってくれ。」

「へっ？いや、でも私暗いの苦手ですし……」「いやいや、なんでだよ！ーお前仮にも有名な幽霊じゃないか！ー幽霊が暗いの嫌いってどんなのや！ー！」

「おにーちゃんーん。入るよーー」

大丈夫鍵はちゃんと掛けてある、上のがっちりした物理的な方もな。

「くそ、こうなったら力づくで！ー！」

「えっ！？嫌ですよー怖いのー」





「うむっ」

さっきまで、胸に顔をスリスリしてた、智慧が急に鼻をスンスンしだす。

「…お兄ちゃん、他の女の匂いがする。」

「はぁ？」

「私がない間に……浮気？」

「いや、智慧さん？怖いですよ（汗）」

目のハイライトがない、この状態には何回かあった事があるが、話題を逸らしても、逃げようとしても無駄だ。方法がない訳ではない、でもそれをしてしまうと、社会的に死んでしまう事になる、諸刃の剣だ。

「浮気？」

「いやちょっ」浮気？」

「だk」？」……」

威圧感だけで返事なんて……コイツできる。

「やっぱり、嫌な予感がしたから帰ってきたけど、まさか的中なんてね……？」

「……ソナナワケナイヨアハハハ……」

「……じゃあいい私で探す」

ゆっくり家にあがってくる智慧。

ヤバイヤバイこのままじゃ俺も貞子もDEAD ENDだ。

選択肢は3つ、そのまま逃げるか、追いかけて説得か、諸刃の剣か。まず、2つ目ま今やったが駄目だった。

残ったのは必然的に最初か最後。

貞子を生贄に晒すか、俺が社会的に死ぬか。

答えは決まってる、彼女を置いて逃げるのなんて嫌だが、あれを言うのはもつとヤダということは

「逃げる」

玄関を裸足で飛び出したところでガシツと何者かに掴まれる。

「おい、なに逃げてるんだ」

くっそ！！親父がいたなんて聞いてないぜ！！

「やめろ！！離せ！！俺はあの自由な空へと羽ばたくんだ！！」

「お前が、何処へ飛び立とうと知った事じゃないが、せめてアイツを止めてからにしろ」

玄関に思いつき叩きつけられる。

「ぐべえ！」

やべえ内臓が、出たかも。

「手加減はした。あの状態だと俺は何もできん、さあ行け息子よw  
w」

この野郎、絶対楽しんでやがる。

「この野郎、解決したらなんか奢れよ」

そう言い残してさっきの客間へ走る。

もういい、このまま逃げられる訳がないし、もう諦めもついた。

客間が近づいてくる。俺は走ってできた勢いを消さずにドリフトの要領で足を横に滑らせる。

襖をその流れで開ける。

ゴトンっ！！

予想以上に強く開いた障子に若干ドギマギしながらも病気モードの智慧に目を向ける。

丁度こつちを見てた智慧と目が合う。ハイライトの消えた目は怖かったがここで目を背けたら神経を逆撫でするだけだ。

そして、目を合わせたまま抱きついて、耳元で囁く。

「こんなに智慧が好きなのにどうやって浮気すればいいんだよ」

ボンっ！！

勢いよく爆ぜる蒸気、近くにあった耳に熱風が掛る。

「ひえ~~~~~」

小声でそっぴいながら後ろに倒れてく智慧、フッこれで俺もはれて変態の仲間入りだな。

智慧の方に目をやると、壊れたようになにか呟きながら顔を真っ赤にしてる智慧がいた。

「お兄ちゃんは智慧のことがお兄ちゃんは智慧のことが……でへへ  
／／／／／」

「よし起きろ。智慧」

「でへへへ」

駄目だコイツ早くなんとかしないと。

ズボッ

間抜けな音が響く。

音のした方をみると。

襖に妙に魅力的な足が生えてた。

誤解しないでもらいたいが。文字のままだ。美しい足が生えてる。

一瞬、訳がわからなかった。

でも、気付いた時にはもう遅かった。

あの可愛い妹がいたはずの場所には神様でさえ怯みそうな鬼、いや

鬼神が立ってた。

なにかぶつぶつ言ってるが、さっきと違って聞こえない。

それから後の事は殆ど覚えてない。

ただ一つだけ言えるのは、<もう智慧は怒らせない。>それだけだ。

## 2話（後書き）

こんにちは主人公のキャラわ完全に見失った俺ですww  
ガチでどんなんだっけ？

えっ？プロット？なにそれ？美味しいの？

## 設定（前書き）

読み返してみたら矛盾だらけでびっくりww  
って事でこんな回を作ってみた。

やゝだよゝ。こんなのみて、やんねゝよゝ。

って人は新しい方が正規な設定なんでよろしく。

## 設定

阿部 定信<あべ さだのぶ>15歳

自称紳士。一応主人公。理想に生きる高2生。チェリーボーイ。陰陽師の家に産まれて、潜在能力は高いが、本人にやる気がないので、基本的な事しか身につけてない。

問題事があると急に冷静になる。

頭は中の下の上。黒目黒髪で顔は中の上。

妹に溺愛されてるのが最近の悩み。

阿部 智慧<あべ ちえ>14歳

陰陽師の両親の血を強く引いた陰陽師のエリート。行動原理は99.9%の確率で兄。

兄の女性関係が0なのは、全てこの智慧のせい。

頭は、上の上で、髪はピンクで目は淡い赤、両親ともに黒目黒髪なところから、その類のところではまことしゃかに隠し子説がうたわれている。普通に可愛い。

阿部 雅彦<あべ まさひこ>44歳

阿部家の大黒柱(笑)。腹黒、加虐主義者、根っからの傍観主義。

一応、陰陽師かいでは有名な陰陽師。

実施的には智慧の師匠。

ハルヒという古泉的なイケメン。

阿部 久美<あべ くみ>34歳

智慧と定信の母親。二人が小さい時に事故死。

かつては、最強の名を欲しいままにした、陰陽師。その実力は阿部家一。

貞子くさだこ不詳

読者のみなさんの想像のとうり、長髪で、不気味な女。  
顔はとてもいいが、その髪のせいで見えない、  
ドジッ娘。天然。怪力。

偶然、定信が拾った、ビデオから出てきた。



## 設定（後書き）

登場人物が増えるごとに書き足していく予定。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1602w/>

---

ドジっ娘貞ちゃんと陰陽師

2011年10月8日13時37分発行